

人間の傲慢とパウロの厳しさ

使徒パウロは各地の教会にあてた13の手紙を私たちに残しているが、その中のフィリピ書、フィレモン書、テモテ書等を読むと神の僕としての「やさしさ」が溢れていて、私たちの心をゆさぶる。特に、コリントの信徒たちにあてた手紙一の第13章「愛の教え」は特に感動的である。彼は愛の人であった。徹底して神の教会を愛し、キリストの愛をもって信仰に生きる民を愛した人であった。

しかし、私たちはパウロの他の一面を見落とすことができない。彼は真実に愛の人であったが、しかし同時に、きびしい怒りの人でもあった。自分の思いのままに福音の真理を曲げようとする人間の罪を容赦することができなかったばかりか（特にガラテヤ書参照）、神にのみ属する栄光を人間に帰し、人間的な知恵や能力や影響力を誇り、他を見下す人間の傲慢（ごうまん）、それによって教会を分裂させ混乱させる分派主義の罪を見過ごすことができなかった。彼は徹底してこのような傲慢を厳しくとがめた人であった。

その厳しさは、今日の聖書の箇所であるコリントの分派主義者たちの傲慢に対する彼の叱責の言葉にもよく表われている。第4節以下で彼は言う、あなたがたは、まるで、パウロがどうの、アポロがどうの、ペテロがどうのと言って、かつてあなたがたに忍耐強く福音を伝え、祈り深く救いに導き、愛をもって教えさとして来た恩師たちのことを云々して、いっばしの権威者のように振る舞っているが、いったい、誰があなたがたをそのような偉い人しているのか、と。

いったいだれが、あなたをそんなに偉い人間にしたのか。あなたの持っているもので、神から与えられたのではないものが一つでもあるか。一つもないとしたら、ではなぜはじめから自分のものであったかのように自慢するのか。（柳生直行訳）。

これまで見たように、人間的な知恵や能力や影響力を誇る「高ぶり」の罪はコリント教会に目だった罪であった。指導者であれ一般信徒であれ、神のみ前に自分を低くすることを忘れるとき、人は「一人を持ち上げてほかの人をないがしろにし、高ぶる」者となることをパウロは警告する（4:6）。人はただキリストのおける神の恩寵によって救われ、生かされているものであるということ、したがって、キリスト者にとって最も大切なことは、自分が神の前に何者でもないことを認めて、自分を誇らず、神の恵みをひたすら感謝して、神と人の前に謙遜に生きることであるということ、パウロはコリントの信徒たちに言葉を尽くして教えるのである。

偉大な教父アウグスチヌスは、その弟子のひとりから、キリスト者の身に付けるべき最も大切な“徳”は何ですかと聞かれたとき、「それは謙遜だ」と答えた。第2は何ですかと聞かれたとき「第2も謙遜だ」、それでは第3は何ですかと尋ねられたとき「第3も謙遜だ」と答えたと言う。パウロの厳しさはこの謙遜を教える厳しさであった。この信仰の謙遜から他に対する愛と思いやりとやさしさが湧いて来る。私たちも信仰に裏打ちされた真の謙遜の人になりたいと思う。